

飛鳥川

ワキ 都人

シテ 母

ツレ（二人） 早乙女

子方 友若

地は 大和

季は 五月

「昨日入りにし三吉野の。く。北の山路へ歸るらん。

「是は上京辺に住居する者にて候。是に渡り候ふ幼き人は。母御を行方なく失ひ給ひ御嘆き候ふ程に。我等御供申し御祈りの為め。昨日三吉野へ参詣申し。唯今都へ上り候。

「一夜寝て。又立ち歸る旅衣。く。昨日過ぎにし道芝の。露も草葉も五月雨の。山水そへて行末の。

岸田の早苗緑にて。波も淵瀬の名にしおふ。飛鳥川にも着きにけり。く。

「御急ぎ候ふ程に。是は、や飛鳥川に着きて候。向ふを見れば笛鼓を鳴らし田歌を謡ひ候ふぞや。暫く御詠め候へ。

「飛鳥川。岸田の早苗とりぐの。袖も緑の気色かな。

「山郭公声添へて。

三人「謡ふ田歌も猶繁し。

シテサシ

「種蒔きし其神の代ぞ久方の。天の村早稲種継ぎて。

三人

「今人の世の末までも。恵みの国は治まりて。我等

如きの民までも。地儀のかまへは豊かなり。然れ

ば神と君が代の。広き御影の有難さよ。

歌

「天の川。苗代水にせき下せ。く。天降ります事

ならば。神ぞ知るらん世のためし。雨も豊かに木

の音も。長閑けき飛鳥風。都はこゝに遠けれど。

あまざかる鄙の国まで。洩れぬ誓ひは有難や。

く。

シテ

「暫く休らひて田を植ゑうずるにて候。

ワキ

「面白や頃は五月の初めつ方。四方の梢も深緑。け

しきを添へて小田の早苗。取り持つ人の裳裾をひ

たし。袖を濡らせる有様は。実にをりくの目前

なり。又是なる川の水出でゝ。本の渡瀬も定かな

らねど。昨日渡りし其まゝに。川瀬を尋ね渡り行

けば。

シテ詞「なふ旅人こゝは渡瀬に候はず。今少し上へ廻り給へ。」

ワキ「なに上を渡れと候ふや。」

シテ「中々の事御廻りあれと申せばとて幾程もなく候。あれに見えたる滯じるしを。しるべに渡り給ふべし。」

ワキ「不思議や昨日三吉野へ。参りし時は此渡瀬。さて

は渡瀬の今日かはり。上へ廻り候ふやらん。

シテ「中々のこと旅人よ。此川筋の昨日にかはりたるとの御不審は。名をまだ知しめさざらん。」

ワキ「いや此川は飛鳥川にては候はぬか。」

ツレ「飛鳥川ぞと知しめして。昨日の淵は今日の瀬にかはるとかねて知しめさぬは。御心なき仰せかな。」

シテ「夜の間の雨に水増り。殊更今日は流洲の。渡瀬は定めなき物を。」

ワキ「實に隠れなき名所や。さてく此飛鳥川の。分きて淵瀬の定まらぬ。謂は如何なる事やらん。

シテ「いやそれは唯山川の。末の流れの石多く。淵瀬の常にかはる事。言ひならはせる心なり。

ツレ「されば歌にも。

シテ「世の中は。

地「何か常なる飛鳥川。昨日の淵は今日の瀬に。なるや夜の間の五月雨に。水層まさりて濁りたる。水

の心も知らずして。左右なう渡り給ふなよ。

地クリ「それ春過ぎ夏たけて。秋もまた暮れぬべし。冬にならんも幾程ぞ。

シテサシ「五月雨に物思ひ居れば時鳥。夜深く鳴きていつち行くらんと。

地「よみし心も今さらに。身に白糸の夜となく。昼ともわかであだし世の。いつまでとてかながらへん。

シテ「思へばあはれ胡蝶の夢に。

地 「遊ぶぞ今日の現なる。

クセ 「御田屋守。今日は五月になりにけり。急げや早苗
老いもこそすれ。實にや五月雨の。晴れぬ日数も
旧り行くに。明日と言ひそ飛鳥川の。水田の浅
緑。立ち連れいざや植ゑうよ。そもく幾許の。
田を作ればか時鳥。四手の田長を朝なく呼ぶと。
詠ぜしもまことなり。死出の山田の時鳥。此土に
来り声立てゝ。程時過ぐる世の中の。教へを知る

故に。時の鳥とは申すなり。

シテ 「五月山梢を高み時鳥。

地 「鳴く音空なる恋やする。我も恋しき緑児の。行方
も知らで足引の。山路に迷ひ里に出でゝ。国々浦々
めぐる日の。積る三年の春過ぎて。夏もはや五月
雨の。振分髪玉のかづら。斯かる業はいつか身に。
馴衣袖ひちて。いざく早苗取らうよ。く。

シテ 「おもしろや雁金寒み暮れし田を。

地 「又時鳥早苗取る。五月の玉の波を散らすぞ。

シテ 「手玉も由良の湊田の早苗。

地 「さすや潮も交じる早苗は。

シテ 「住吉の岸田。

地 「入江にまかせしは。

シテ 「難波田の伏水。

地 「都辺に植ゑしは。

シテ 「伏見田鳥羽田の。

地 「是は都に近き手弱女の。袖吹きかへす飛鳥風。心

も乱るゝ青柳の緑児。恋しやなつかしや。

ロンギ地

「今までは。行方も知らぬ賤の女の。不思議や見れば母上か。友若こゝに來りたり。

シテ

「我子ぞと。聞けば夢かと夕暮の。それかあらぬか夢ならば。覚めての後はいかならん。

地

「よくく見れば自が。尋ぬる母や。

シテ

「友若に。

地

「地 苧生の松原の。 尽きぬ逢瀬や飛鳥川。 深き契りの
親と子に。 ふたゝび逢ふぞうれしき。 く。」

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第七輯』大和田建樹 著